

幼稚園におけるウサギとの生活に関する実践的考察 ：歌「うさぎのうーちゃん」の協同的構成

滝口 圭子¹⁾・根津知佳子²⁾・後藤太一郎³⁾

筆者らは、三重大学に隣接する学校区にある白塚幼稚園で、近年学校飼育動物として推奨されているホーランドドロップ種というウサギの飼育に参与した。そして、このウサギが2歳の誕生日を迎えるまでの間の約2か月、園児や教諭がウサギとのかかわりの中で発したつぶやき等を三重大学教育学部の幼児教育コースの学生がまとめ、学生が作成した歌詞とメロディを園児と一緒に歌い、保護者も参加するウサギの誕生日会で一緒に合唱するという一連の活動を展開した。これらの経験により、学生は幼稚園における園児とウサギとの関わりについて、園児の生活空間において体験的に知ることができた。生活時間を共有しながら園児の言葉を丁寧にすくい上げ、素朴な思いを形にしていっていった過程は、今後の学生の実践知の基盤になり続けると期待される。

キーワード：ウサギ、飼育活動、うた創り、実践知

近年、管理面や衛生面等における問題から、動物飼育を控える幼稚園や保育園が増加する一方で、動物飼育の幼児の知的・情緒的発達に果たす役割が改めて注目を集め（藤崎，2004）、多くの研究が行われている。幼児教育における動物飼育の意義の主張は、今に始まったことではなく、明治以後常に日本の幼児教育が掲げる保育内容のひとつとして重視されてきた（並木，1985）。山崎（1980）は、動物飼育に直接的に関連する保育内容「自然」領域の位置づけについて、Ⅰ・明治前期（1876～1886）の「形象教育期」、Ⅱ・明治後期（1887～1912）の「実物教育開始期」、Ⅲ・大正期（1912～1926）の「体験教育期」、Ⅳ・昭和前期（1926～1944）の「実験実地教育期」、Ⅴ・昭和後期（1945～1980）の「科学的探究意欲育成期」と5期に分類し、保育内容史における変遷をまとめている。

ここで、現在の幼児教育において、動植物との関わりがどのように意義づけられているのかを、幼稚園教育要領（文部科学省，2008）における保育内容・領域「環境」（資料参照）に基づいて確認してみよう。まず、「環境」のねらいのひとつとして、「(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」ことが掲げられている。保育内容は、「(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」、「(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く」、「(4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ」、「(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」と、さらに具体的且つ実践的に記述されている。以上の保育内容を取り扱う上では、「(2) 幼児期におい

て自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること」や、「(3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること」に留意する必要があると述べられている。

幼稚園教育要領における動植物との関わりについての記述を確認するまでもなく、都市部を中心に身近な自然が急速に消失し続けている現状に加え、防犯や衛生管理の必要性から、園内外での保育に多様な制限が設けられている現状を振り返れば、幼児教育において、自然と触れ合うこと、中でも動植物と接することが、生命そのものについて、また生命との関わり方について学ぶ数少ない、そして貴重な機会になっているといえるであろう。そして、以上のことは、子どもと共に過ごす多くの大人が、時には危機意識を伴って感知しているのではないだろうか。

さて、幼児を対象とし、特に園生活におけるウサギとの関わりに焦点を当てた研究として、藤崎（2004）が挙げられる。藤崎（2004）は、幼稚園の年長児60人、年中児53人、年少児20人を対象に、幼稚園のウサギ小屋に入室した時の発話および行動をビデオカメラで撮影し、幼児とウサギのやりとり場面を分析した。併せて、幼児がウサギの「心」についてどのように理解しているのかを調べるために個別でのインタビュー調査を行った。その結果、飼育活動中に最も多く生じた行動は、動物を「見る」と「餌を与える」というものであり、年齢間比

1) 三重大学教育学部幼児教育講座
2) 三重大学教育学部音楽教育講座
3) 三重大学教育学部理科教育講座

較によると、年少児はウサギを追いかけたり、餌を投げたりする行動が多かったのに対し、年長児は掃除やウサギに対するコミュニケーション活動（ウサギに声をかける、ウサギに向かって手を叩く、手招きする等）が多かった。また、インタビュー調査の結果からは、ウサギの生態に添う文脈で生起する知覚、感情、欲求、信念については、多くの幼児がその存在を認めることが示された。その一方で、ウサギの心的機能に対する擬人化の高い反応（具体的には、ウサギが「かわいいと誉めると喜ぶ（感情）」「新しいおもちゃを欲しが（欲求）」「ウルトラマンをカッコいいと思う（信念）」かどうかという質問に対して“はい”と回答する）は加齢に伴い減少していた。また、同じ年長児で比較した場合、ウサギ小屋への入室日数が多い幼児の方が生物学的知識を豊富に有していたが、その一方で、ウサギの心的機能に対する擬人化が増え、さらにウサギに対する言葉かけも多くなっていた。藤崎（2004）は、発達に伴いウサギに関する生物学的な知識を獲得していくと同時に、ウサギの意図や感情、欲求に対する理解の仕方も変化していく様子を明らかにしている。また、坂井田・間瀬（1991）は、ウサギの飼育経験がない私立幼稚園年中児を対象に、2週間のウサギ飼育経験を設けたところ、飼育経験後のウサギの絵の写実性が増し、ウサギに対する自己中心的な扱い方が減少したことを報告した。

以上のような幼児を対象とした先行研究においては、ウサギを飼育することによって、子どもの科学的・生物学的認識がどのような変化していくのかを追跡した研究が主流となっている。つまり、ウサギは幼児の科学的・生物学的認識の発達を促す刺激もしくは環境の一つと捉えられており、ウサギに関する発言内容についても、その正確さや適切さの程度が分析の観点となっていることが示唆される。確かに、ウサギと幼児との情緒的なつながりに比重を置いて実践を記述しようとすれば、幼児に認められる明確な変容を追跡することが困難となるため、一貫性がなく散漫な内容になりがちであり、また、感情の揺れ動きという個人的な体験に言及する際には、ともすると主観的な内容になりがちである。そして、それは実践報告にはなり得ても、研究としてまとめることは容易ではない。しかしながら、前述したように、動物飼育は幼児の情緒的発達においても一定の役割を果たすと想定されているのであり、そうであるならば、幼児がその園生活において、動物とどのような関係性を作り上げながら時間を重ねているのかについて追究しようとする研究が、求められているといえるであろう。

本研究は、園児のウサギに対する認識の変容を明らかにするものではない。また、残念ながら、園児とウサギとの情緒的なつながりの構築と深化を追跡するものでもない。しかし、幼稚園で共に生活しているウサギの歌を

創るという活動を軸に据えることで、園児とウサギとの関係性の有り様を、いくらかでもすくい上げることができるのではないかと考えている。本研究は、幼稚園で初めてウサギと出会い、ウサギに「うーちゃん」という名前を付け、「うーちゃん」との生活を積み重ねていく中で、「うーちゃん」の歌を創ろうという活動が自然発生的に登場した背景を踏まえ、その「うーちゃん」の歌を創るという活動を追跡、記述するものである。

本研究を展開する現場となった津市立白塚幼稚園と三重大学教育学部との連携活動については、特に未就園児保育の運営支援を展開して3年になる。本研究は、幼児教育講座、音楽教育講座や理科教育講座の学生や教員が参加しているため、三重大学と近隣地域という外部との連携の報告であると共に、三重大学教育学部に所属する講座間の連携という内部連携の報告でもあるという点も記しておきたい。

白塚幼稚園とウサギとの出会い

学校飼育動物の代表的なものとしてウサギが挙げられる。学校飼育動物の活用を推進している群馬県獣医師会は、平成10（1998）年に幼児が関わる上で安全なウサギの品種として、ホーランドロップが適していることを提唱した。その理由として、ウサギの中でも性格が温厚で、サイズが1.5 kg程度の小型である上、愛らしい行動をするために人気が高いことを挙げている。

三重県の幼稚園や小学校では本種の飼育例については報告がないため、三重県内における学校飼育動物の推進を検討する上で、本種の学校飼育動物としての価値を実践から確認する必要があった。また、大学における生活科等の授業でも、好ましい学校動物飼育の事例や実物を紹介することを計画していたことから、後藤を中心に、ウサギ飼育について白塚幼稚園長浅田氏と検討した結果、平成20（2008）年4月に白塚幼稚園でのウサギ飼育を導入するに至った。

ホーランドロップ種の入手にあたっては、愛媛県のブリーダー（花うさぎ）に依頼し、幼稚園において飼育する上で、特に性格が穏やかな雄個体を選定してもらった。ウサギ飼育は、幼児が在園している間は屋外とし、ケージもしくは地域の協力者が作成したサークルの中に入れ、そうした時間帯以外はケージに入れて職員室で管理した。

「うさぎのうーちゃん」の歌創り活動の概要

(1) 実施要領

日時及び各回の活動内容：表1に示す。

場所：白塚幼稚園くじら組（年長児クラス）及び遊戯室
対象：くじら組（年長児クラス）の園児11名

参加者：白塚幼稚園浅田美知子園長 くじら組担任・足立深雪教諭 三重大学教育学部幼児教育コース4年生4名及び3年生1名 教育学研究科音楽教育専修2年生1名 音楽教育コース2年生1名

参加者及び記録者：滝口が全活動に参加し、ビデオ撮影を担当した。全活動に浅田園長と足立教諭が参加し、スーパービジョンを行った。

(2) 活動内容

第1回：平成22(2010)年1月25日(月)

・くじら組の部屋の中に、積み木で囲ったうーちゃんの遊び場が用意してある。その中に浅田園長とうーちゃんがいる。足立教諭からの紹介後、うーちゃんと遊びたい園児は積み木の遊び場所にやってくる。浅田園長が、園児らに「うーちゃんにいっぱいお話してあげて」と語りかける。

・学生は、浅田園長の多様な問いかけに応じた園児たちの言葉や、うーちゃんの様子を見て思わず園児たちの口からこぼれ出た言葉を、メモに書き留めた。

・大学に戻り、学生は、第1回活動日以前に足立教諭により収集された言葉、第1回活動において学生が収集した言葉、また第1回活動日の浅田園長によるエピソードを一覧にまとめた(表2)。

・学生は、第2回活動日までに、表2の言葉やエピソードを元に歌詞を作成し、その歌詞にメロディーをつけることに取り組んだ。2小節ほどの歌詞とメロディーを4種類用意した。

第2回：平成22(2010)年1月27日(水)

・第1回活動後に、学生が作成した2小節ほどの歌詞とメロディーを園児たちの前で発表した。第2回活動において用意した楽器はキーボード、ギター、ピアノ、木琴、リコーダーであった。

・学生が発表した歌詞の中に、自分の発した言葉が使われていることを発見し、驚き喜ぶ園児たちの姿があった。

・浅田園長による説明の後、足立教諭の支援のもとに、学生1人と園児数名のグループを4グループ作成した。キーボードグループ(平野・園児3名)、ギター・ピアノグループ(山崎・園児3名)、木琴グループ(中嶋・園児2名)、リコーダーグループ(辻・園児3名)であった。

・学生は、園児たちから出た言葉を、自身の担当楽器を用いて、即興でメロディーにしていった。そうしたやり取りを繰り返し、各グループで、2小節ほどの歌詞とメロディーを1つずつ考案した。

・各グループで作成された歌詞とメロディーを、1グループずつ紹介し合い、全員で共有した。

・学生は、第3回活動日までに、第1回、第2回活動において考案された歌詞とメロディーをつなげる等の創作をし、うーちゃんの歌を作詞作曲した(歌詞：表3上段左欄)。

第3回：平成22(2010)年2月1日(月)

・第3回活動において用意した楽器はキーボード(平野)、鉄琴(辻)、木琴(中嶋)、アルトサクソ(森陽子)であった。

・園児たちの前で、学生が1人ずつ、うーちゃんの歌に込めた思いを話した。

・学生が作詞作曲したうーちゃんの歌を発表した。

・園児たちや足立教諭も一緒にうーちゃんの歌を歌った。

・大学に戻り、学生は、滝口からの指摘を受け、歌詞の改訂を行った(表3上段右欄)。

第4回：平成22(2010)年3月4日(木)

・遊戯室に、えび組(年少児クラス)、くじら組(年長児クラス)の園児たち、白塚幼稚園教諭3名、来年度入

表1 「うさぎのうーちゃん」の歌創りの活動日時と活動内容

平成22(2010)年	活 動 内 容
1/15(金)	白塚幼稚園での打ち合わせ
第1回 1/25(月) 10:00~10:30 am	歌詞に使用することを目的とし、園児とうーちゃんとの関わりにおいて、園児から発せられた言葉を収集した。 参加者(学生)：辻・中嶋・平野・山崎・森陽子
第2回 1/27(水) 9:30~10:10 am	学生1人と園児数名の4グループを作り、各グループで2小節ほどの歌詞とメロディーを考案した。 参加者(学生)：辻・中嶋・平野・山崎
第3回 2/1(月) 10:00~10:15 am	前回、前々回に収集された歌詞とメロディーを活かしながら、学生が作詞、作曲したうーちゃんの歌を、園児に発表した。 参加者(学生)：辻・中嶋・平野・森陽子
第4回 3/4(木) 11:00~11:15 am	うーちゃんの2歳の誕生日会において、音楽教育コースの学生により曲の洗練及び伴奏譜が施された「うさぎのうーちゃん」を、園児らに披露した。 参加者(大学教員)：後藤・根津 参加者(学生)：高林・山崎・森萌野
第5回 3/24(水) 9:30~10:30 am	卒園式 卒園児による「うさぎのうーちゃん」合唱

園予定の幼児と保護者、大学関係者が集まる。浅田園長より、「今日はウサギのうーちゃんの2歳の誕生日会であり、お祝いにうーちゃんの歌『うさぎのうーちゃん』を贈る」ことが伝えられる。

・根津らが園児たちにリコーダーを紹介し、「うさぎのうーちゃん」を吹く。吹き終わると、幼児から「2番も！」と声上がり、2回目のリコーダーの演奏に合わせて幼児や参加者が2番の歌詞を歌い始める。3番も同様である。

・浅田園長の話の後、参加者が「うさぎのうーちゃん」を合唱する。根津が「優しいうーちゃんバージョン（穏やかなテンポ）」と「元気なうーちゃんバージョン（快活なテンポ）」の2種のピアノ即興を提示すると、園児らも歌い方を変えて歌う。他の参加者も歌っている。

第5回：平成22（2010）年3月24日（水）

・卒園式において、園児らが、呼びかけ形式で1年の思い出を振り返る。所々に歌を入れている。

・「冬の思い出」の最後の方で、「うさぎのうーちゃん」は、みんなのアイドルでした。大好きなうーちゃんの歌を、三重大学のお兄さん、お姉さんと一緒に創りました」という呼びかけがあり、その後、ピアノ伴奏に合わせて、「うさぎのうーちゃん」を卒園児全員で合唱する。

(3) 学生の感想

辻彰士：初めての取り組みでしたので、当初はどのように頑張ればよいのかよくわからず、戸惑うばかりでした。しかし、子どもたちのうーちゃんのことが好きという気持ち、白塚幼稚園の先生方の歌の完成を楽しみにしていた

表2 収集された園児の言葉やエピソード

足立教諭が収集した言葉	1歳・3月生まれ・背中がふっくら・茶色・足が白い・耳がだらんとしていてかわいい・人気者・今はエサをたくさん食べる・草のエサはあまり食べない・にんじんの赤いところがすき・緑の葉はきらい・ウンチがたくさん出る・上手にトイレする・逃げるのが速い・うーちゃん逃げていった・植木鉢の下にいるよ・いたずら・トンネルもぐるのが好き・2本足で立つ・悲しい時に心配してくれる・うーちゃんが側にいる
学生が収集した言葉	こんにちは・こっただよー・アイドルや・紙食べた・閉じこめたらあかんで・触ると嬉しい・ふわふわ・すごいこの子・ふわふわ・ぶくぶく・あったかい・足がおっきい・耳つるつる・男の子・大好き・どうしてこんなかわいいの・赤ちゃんみたい・軽かった、あんな大きいのに！！
浅田園長によるエピソード	子どもたちが、友達とけんかした時に、うーちゃんのところまでじーっとしていることがあった。うーちゃんの側にいると安心するようだ。子どもたちにとってうーちゃんは、あったかみのある、側に寄ってきてくれる、かわいい存在である。

表3 幼児教育コースの学生が作成したうーちゃんの歌の歌詞と楽譜

第3回活動で披露した歌詞	第3回活動後に改訂した歌詞
<p>【1番】 元気なうーちゃん びよんびよん びよんびよん 3月生まれの男の子 どうしてこんなにかわいいの みんなのアイドル うーちゃん</p> <p>【2番】 かわいいうーちゃん びよんびよん びよんびよん 大きなお耳が自慢です どんなときでも一緒だよ みんなのアイドル うーちゃん</p>	<p>【1番】 元気なうーちゃん びよんびよん びよんびよん 3月生まれの男の子 赤ちゃんみたくによく眠る みんなのアイドル うーちゃん</p> <p>【2番】 いたずらうーちゃん びよんびよん びよんびよん 大きなお耳が自慢です かなしいときでも一緒だよ みんなのアイドル うーちゃん</p> <p>【3番】 ふわふわうーちゃん びよんびよん びよんびよん おふとんみたくに気持ちいい どうしてこんなにかわいいの みんなのアイドル うーちゃん</p>

る気持ちをひしひしと感じてからは、とてもやりがいを抱きました。歌詞やメロディーを考えることの楽しさを知ることができ、貴重な経験となりました。ありがとうございました。中嶋祐太：子どもたちがうーちゃんと触れ合う姿から言葉を拾い、その言葉を歌詞にしていくことはとても難しかったです。言葉からメロディーを引き出し、そのメロディーに違和感なく続く言葉を選んでつなげなくてはならないので、選択できる言葉が限られました。しかし、私たちが創った歌を、子どもたちが歌ってくれた時には、不思議な感覚がしてとても嬉しかったです。ありがとうございました。平野梢：歌を創るという初めての試みで、最初は不安がありました。しかし、子どもたちのうーちゃんへの思いを聞いたり、うーちゃんと接している時の表情を見てみると、いろんなフレーズが浮かんできて、とても楽しく歌を創ることができました。子どもたちがすぐに覚えてくれて嬉しかったです。山崎理沙：子どもたちの言葉を拾い、その言葉を歌にするというのはなかなか難しかったです。しかし、第2回目の活動で、子どもたちの言葉をもとに創ってきた数小節の歌を、子どもたちに披露した時の子どもたちの笑顔は、とても印象的でした。この歌は、白塚幼稚園の子どもたちにとっても、私たちにとっても、思い出深い歌になると思います。森陽子：歌を披露した時、子どもたちは歌詞の中から自分の気持ちに合う部分を数えたり、すぐに覚えて一緒に歌おうとしていました。うーちゃんを大切に思っている気持ちが伝わってきました。

考 察

本研究が分析、考察の対象とした活動は、わずか5回であったが、この取り組みが着想され、そして成立した背景には、白塚幼稚園の園児や教職員とうーちゃんとの約2年に渡る日々の生活があったことを忘れてはならない。本研究では、そうした背景に関する記述を省いているが、それでも「悲しい時に心配してくれる」「うーちゃんが側にいる」「幼児が、友達とけんかした時に、うーちゃんのところまでじーっとしていることがあった」(表2)等の言葉から、園児や教職員とうーちゃんとの重ねてきたこれまでの生活や、培ってきた関係性をうかがい知ることができよう。

以下、まず、白塚幼稚園の園児にとっての本活動の意義について考察する。白塚幼稚園においては、本活動の実践以前に、うーちゃんのことと触れた言葉をメロディーに乗せて口ずさむ姿が認められたようであった。浅田園長によれば、幼稚園での生活においては、園児のそうした姿(表現活動)はよく見受けられるようである。本活動は、そうした幼児の自発性に基づいた活動を展開していくことを目指していたが、実際にはなかなか困難であっ

た。第2回活動において、4グループに分かれた後、幼児は、学生や友だちと共に歌詞とメロディーを考えながら、クラスという公的な場で、客観的また理性的に考えるという行為を求められており、それは、気持ちよさを基盤とし、意識することなく言葉とメロディーを口から自由に発する状況とは明らかに異なっていたといえるからである。加えて、例えば、当初から音楽を専門とする学生が第2回活動を担当していたとしたら、より効果的に楽器を用いながら、幼児のつぶやきを音に乗せることが可能であったと想定され、さらに柔軟で活発な活動になり得たとも考えられる。実際の活動においては、幼児教育コースの学生の支援のみでは、なかなか活動が進まないグループも認められた。そのような場合には、浅田園長や足立教諭による支援により、活動の展開が可能となった。

このように、本活動において、幼児が、自分たちのつぶやきを歌にしていく楽しさや喜びを明確に感じることはできたとは言えないかもしれない。ただ、公的な場で理性的に考えるという行為は、4月の小学校入学以降に求められる行為でもあり、学びの基礎になると考えられる。幼稚園や小学校の先生でもなく保護者でもない、自分たちにより年齢に近い大人と、物理的にも近い距離でやり取りをしながら、愛着のある飼育動物の歌を創るという活動において、そのことに取り組んだことは、園児にとって特別な意味を持ち得るかもしれない。そのようにして創られた「うさぎのうーちゃん」であるが、第3回活動後、園生活において自発的に歌われることも登場し、また、幼稚園関係者以外の大人を前にして発表する機会も幾度か設けられた。そうした機会を通して、幼児はそれぞれに、達成感、充実感、誇らしい気持ち等を抱くことができたのではないかと考える。

次に、幼児教育コースの学生にとっての本活動の意義について考える。まず、幼稚園における園児とウサギとの生活について、部分的にはあるが、体験的に知ることができたという点を指摘したい。園児の生活にいかにかうーちゃんが溶け込んでいるのか、うーちゃんとの生活をいかに園児が言葉に落とししていくのかといった点について、学生自身が見聞きし、感じるという貴重な経験となった。次に、園児の言葉を丁寧にする上げながら保育を構築していく過程、また、園児の素朴な思いを形にしていく過程に臨むことができたという点が挙げられる。幼稚園や保育園において、保護者や近隣住民を招いて催される発表会においては、クラス毎に音楽劇が披露されることが多いといえるが、近年は、音楽劇を創り上げていく過程において、担当となるクラスの園児と丁寧なやり取りを繰り返しながら、物語の流れ、配役、台詞等を決めていくことが多い。つまり、保育者には、幼児のつぶやきを丁寧な拾い上げ、そうしたつぶやきから幼児の思いを読み取り、その思いを形にしていくという力(創

造力・構成力)が求められているということである。学生は、本活動においてその一端に触れたに過ぎず、また、彼らにとって初めてとなる取り組みを首尾よく展開していくことは、極めて困難であったようで、学生の感想にも活動への戸惑いが確認される。しかし、保育現場に出る前にそうした場に臨むことができたことは得難い経験であり、この経験は今後の彼らを支える実践知の最下層に在り続けるのではないだろうか。

昨今、保育者の仕事はますます多様化、複雑化を極め、例えば、保護者支援、地域の子育て支援、特別支援教育等枚挙に暇がない。その一方で、保育者志望学生の経験不足という課題も見逃せない。保育者を志す学生が身につけておくことが望ましい知識、態度は多様化の一途を辿っているが、学生自身の理解力、表現力、対人関係力、経験等については、個人差が拡大しているように思える。そのような状況にあっては、学生の評価すべき側面を積極的に見出しながらも、学生の実態を的確にとらえた上で、より適切な教育課程を構築し、実践していく必要があるといえるであろう(滝口・倉盛・田爪・横山・中澤・秋田, 2010)。そうした現状を振り返る時、教員養成学部である本学部における本活動の意義が、改めて浮かび上がってくるように思われる。近年、三重大学教育学部と近隣地域とが協同で開発、蓄積している連携実践を、主として大学教員ができ得る限り記述し、考察する努力を重ねていくことで、幼児、教職員、学生、学生を

送り出す大学、それぞれにとっての意義が明らかになり、また、それぞれが果たしていくべき今後の役割を新たに見出していくことができるのかもしれない。一人ひとりのそうした弛まぬ努力が、連携実践の真の蓄積をもたらすのではないだろうか。

引用文献

- 藤崎亜由子 2004 幼児におけるウサギの飼育経験とその心的機能の理解 発達心理学研究, 15, 40-51.
- 文部科学省 2008 幼稚園教育要領：平成20年告示
フレーベル館
- 並木美砂子 1985 幼児の動物飼育活動の特徴と生物概念について 心理科学, 8, 19-29.
- 坂井田節・間瀬香 1991 動物の飼育体験が幼児の思考の発達に及ぼす影響 聖徳学園岐阜教育大学紀要, 22, 203-212.
- 滝口圭子・倉盛美穂子・田爪宏二・横山真貴子・中澤潤・秋田喜代美 2010 日本教育心理学会総会発表論文集, 52, 134-135.
- 山崎千枝 1980 保育内容「自然」の研究 嵯峨野書院

資料 保育内容領域「環境」のねらい・内容・内容の取り扱い

保 育 内 容 領 域 「環 境」	
周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。	
ね ら い	<ol style="list-style-type: none"> 1 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。 2 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。 3 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。
内 容	<ol style="list-style-type: none"> 1 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。 2 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。 3 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。 4 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。 5 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。 6 身近な物を大切にする。 7 身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。 8 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。 9 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。 10 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。 11 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。
内 容 の 取 扱 い	<ol style="list-style-type: none"> 1 幼児が、遊びの中で周囲の環境とかかわり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にする。特に、他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること。 2 幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること。 3 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にしたい気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。 4 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切にし、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。